

二

次の文は、西郷隆盛を論じたものである。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

西郷はいまや日本に樹立せられようとしている近代に対して、本質的に古い世代のひとりであった。いふなればその最後のひとりであった。西郷には「文明とは道の普く行はるるを賛称せる言にして、宮室の荘嚴、衣服の美麗、外観の浮華を言ふには非ず」という有名な言葉がある。これは彼の西欧批判でもあり明治政府の文明開化主義への批判でもある。だがそういう言葉より、私をほんとうにおどろかすのは次のような言葉である。「己れを愛するは善からぬことの第一也。決して己れを愛せぬもの也」。こういうマクシムは今日のわれわれにとつてたんに実行がむずかしいというばかりのものではない。これはわれわれにとつて、それを本気に実行しようと思ひ立つ心のバネがまったく失われてしまつていられるようなマクシムなのである。われわれはこういうマクシムを自分に課す本気のでどころを見失つてしまつていられる。だが、それはわれわれにとつても美しい、もしそれを実現することができたら何もものにもかえがたい至福であるようなマクシムである。西郷は本気でこのマクシムに近づこうとした人であつたらしい。そしてわが身をその戒律と至近の距離におくことができた人であつたらしい。

もちろんこういう格率はわが国の士族の伝統的教養である儒学の道徳観に由来するものといえるだろう。西郷が佐藤一斎の『言志四録』の信奉者だつたことは周知のとおりである。だがこの言葉の深部にはそういう儒学的リゴリズムとは異質な、たゆたうようなゆたかな生命のリズムが感じられる。私はこういうマクシムの背景には、人と人とのあいだのコミュニケーション(1)に対する肉感的な幻覚が存在するものと信じる。もし西郷が南島に流刑されて島人と交わることがなかつたら、西郷にはこの言葉はなかつたと信じる。このような人と人との交わりにおいてなりたつコミュニケーション(1)的な感覚は、わが国の生活民たちがその悠久の歴史を通じて保持して来た伝統的感性の核心であつた。そしてまたそれは、大久保、木戸、伊藤、山県らの維新革命の勝利者がおそらく生涯ただの一度も感じとつたことのない感覚であつた。

己を愛さずともすむ心、それは己を羞むるぶこつな魂であるにちがいない。内村鑑三はその感動的な西郷論のなかに次のような挿話を録している。「実に彼は他人の平和を擾すことを非常に嫌つた。他人の家を訪ねても、進んで案内を乞はず、玄関

に立つたまま折よく誰かが出てみつけてくれるまで、そこに待つてゐることがよくあつた程である」。彼の数ある逸話のなかで、私はこの挿話にだけほんとうにおどろく。しかしこの人格は、古い日本人にとつてはある意味ではなじみ深いものであつた。私がおどろくのは私が現代の日本人だからである。古い日本人にとつてこのような人格はしたわしくはあつても、こゝさらおどろくべきものではなかつた。なぜならそれは伝統的な類型のひとつであつて、そのような人格の形象はこの国の歴史において、少数ではあつてもしばしば現れることがあつたからである。

明治の初期、わが国の重大な社会現象としてうかびあがつた世代的分裂について、中江兆氏は『三酔人経綸問答』で興味ある指摘を行つてゐる。彼は同時代の日本人をすべて恋旧家と好新家とに分類することができるとし、その基準を年齢と出身藩においた。「好新元素に富むる徒は、理論を貴び、腕力を賤み、産業を先にし、武備を後にし、道徳法律の説を鑽研し、経済の理を窮究し、平居文人学士を自ら任じて、武夫豪傑の流、叱咤慷慨の態は、其痛く擯斥する所なり。若夫れ恋旧元素に富むる徒は然らず。彼れ其れ自由を認めて豪縦不羈の行と爲し、平等を認めて鏗刃破滅の業と爲し、悲壯慷慨して自ら喜び、法律学の信屈なる、経済学の縝密なるが如きは、其深く喜ばざる所なり」というのが、その世代の特質の要約である。私がこの世代論において注目するのは、恋旧家の肖像が次のように描かれてゐることである。

(あ) 恋旧元素は……平生無事の日(2)に在ては、高拱緘黙して自ら喜び、一切緻密なる思考を須(3)ひ円滑なる実行を要する事項は、瑣碎なりとして、之が措置を施すことを、屑とせずして、曰く、我れ素より迂拙にして、此事に当るに足らず。誰某、慧巧にして幹練なり。能く勉勵して事に従ふ。彼れ自ら當に之を弁ず可きのみ、と。蓋し平生大関係無き事条に於ては、専ら愚を以て自ら智とし、拙を以て自ら巧とし、其或は知る所を枉(4)げて知らずとし、其或は能くする所を故らに能くせずとして、他人に推諉して肯て与ら(5)ず。其意に以為(6)へらく、是れ小事のみ、何ぞ心を用ふるに足らん、と。一旦利害の關する所有るに及(7)では、頭を昂(8)げて一言し、衆議洵々たるも略ぼ恤(9)ふること無く、可(10)と無く否(11)と無く、必ず其言ふ所を行ふことを以て目的と為して、中道にして遽(12)に他人の議に従ふが如きは、其極て恥辱とする所なり」。

おそらく板垣をモデルにしたのであろうが、この性格は活写されている。私はこういう性格の人物を知っているし、こういう性格がかならず実務社会の不適合者ないしそれへの反抗者であることも知っている。西郷は広い意味でこのような性格の人格であった。『遺訓』の一節で彼は小人の害について言及し、「能く小人の情を察し、其長所を取り之を小職に用ひ、其材芸を尽さしむる也」と小人を使う要領を教えている。「小人」とはまさしく好新元素に富む新世代の実務家であり、西郷の態度は兆民描くところの恋旧家の態度と符合する。このような心性を一語で要約するのは困難であるが、反功利主義という規定はそれほどはずれのものではあるまい。西郷は「道に志す者は偉業を貴はぬもの也」という一句を『遺訓』のなかに残しているが、むろんこれは反功利的信条の告白である。

「草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也。今と成りては、戊辰の義戦も偏へに私を営みたる姿に成り行き、天下に対し戦死者に対して面目無きぞ」、有名な話だが、西郷はこういつてしばしば涙を流すことがあったそうである。清廉であつても無能な為政者より、たとえ個人的には悪徳が認められても有能な為政者のほうが、結果として国民に福利をもたらすものだ、というのはわれわれの近代人的常識の一部である。西郷にはこういう結果優先、業績至上の考えかたがどうしても理解できなかっただろう。ドストエフスキ流に言えば、⁽⁴⁾そのよ⁽⁴⁾うな考えかたには「何かいまわしいもの、世道人心をまつぶたつにたち割るようなもの」があるからである。明治十年戦争はあ^{*}るレベルでいえば、実務官僚と現実的な権力執行者に対する夢想家の反功利主義的反乱であつた。

(渡辺京二「逆説としての明治十年戦争」より)

注(*)

マクシム||行為の個人的規準。

格率||マクシムに同じ。

佐藤一斎||江戸後期の儒者。

リゴリズム||厳肅主義、厳格主義。

コミュニティ||共同体。

範型||類型、タイプ。

平居||平生。

擯斥||しりぞけること。

豪縦不羈||勝手気ままで横暴なこと。

鏟刈破滅||大なたをふるつてなぎ倒すこと。

佶屈||文字・文章がかたくなるしくて難解なこと。

縝密||綿密。

高拱緘黙||泰然と手をこまねき口をつぐんでいること。

幹鍊||物事に熟練していること。

大関係無き事条||たいして重大でない事柄。

推諉||自分は遠慮し、他人に付託すること。

利害の関する所有る||重大な結果をひき起こす。

洵々||騒ぎどよめくさま。

中道||中途。

板垣||板垣退助。

戊辰の義戦||戊辰戦争。一八六八年から翌年まで行われた新政府軍と旧幕府側との戦いの総称。

明治十年戦争||西南戦争。一八七七年の西郷隆盛らの反乱。

問一 傍線部(1)の意味するところをわかりやすく述べよ。

問二 傍線部(2)について説明せよ。

問三 傍線部(3)について、「恋旧家」が事柄に対処する時の態度を、引用文(あ)の内容に基づいて簡潔に述べよ。

問四 傍線部(4)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問五 波線部について、その理由を本文の内容に基づいて説明せよ。

白紙